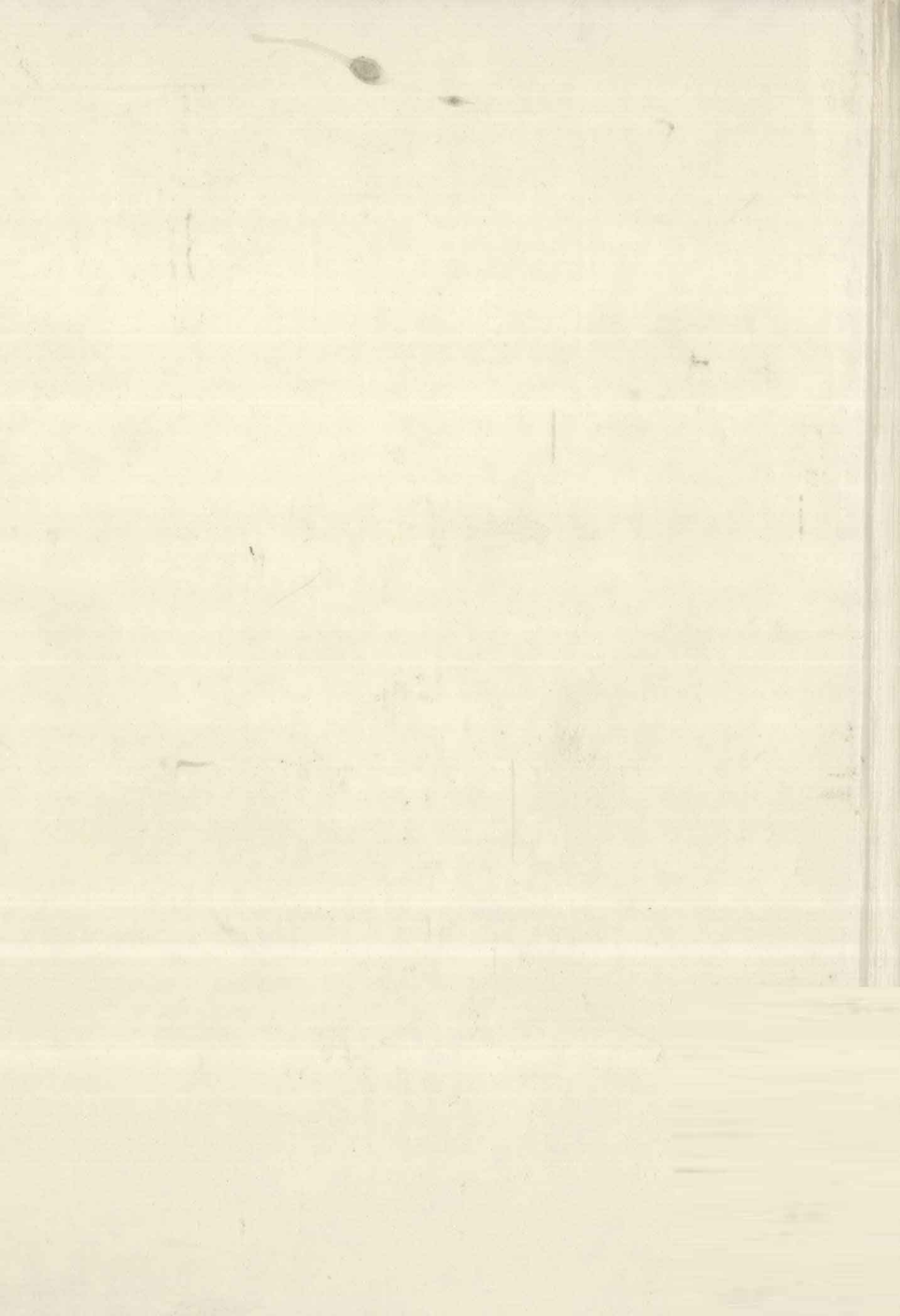




木下杢太郎全集

第十四卷

木下李太郎全集 第十四卷

第十七回配本(全二十四卷)

一九八二年九月二日 発行

定価 三七〇〇円

著 者 太^{おお}田^た正^{まさ}雄^お

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五
発行所 鐵 岩 波 書 店

電話 〇三・二五四二一
振替 東京六三二四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

西班牙の風物と其國の殖民傳敎史	一
「天草本伊曾保物語」	六
十六七世紀に於ける西班牙の繪畫	九
聖祕蹟の御馬車	二五
大坂城	三〇
巴里の點心舖	三五
吉利支丹宗門に關係のある美術	四〇
長崎・室津	四五
颯嘯庵弄墨	四九
エネチア・長崎	五三
記憶の爲めの書き附	五四

フウゴオ・フォン・ホフマンスタアル父子の死	二七
白秋全集	三
天正年間九州諸大名より羅馬に遣はされたる四青年 使者の歸朝	四
ジャン・クラツセの日本西教史とルイス・フロイス の諸年報と	二三
太閤秀吉の大卷狩	二七
風霜集	二六
ヲルテエルの小説に現はれた徽毒起源の問題	二五
關白とアナトミイ	二九
或日の森鷗外先生	二三
「南蠻寺門前」	二六
北米通信	二四
隅田川の諸橋	二八

晩春初夏	一九六
ポオル・ジエラルヂイ	二〇二
伊豆伊東	二二八
天正年間耶蘇會諸教育機關の移動	二三〇
秀吉と伴天連	二四六
「切支丹傳道の興廢」	二六五
南蠻屏風	二六八
郵船アクイタニアより	二九一
シヤム及びフィリッピンに於ける癩療養所	二九四
「天正遣歐使節記」	三二六
黒・フィリッピン	三二九
『乙丑周遊記』序	三三九
ブリヤンの事其他	三三三
マニラ板ろざりよ記録の事其他	三四〇

晴窗帖	三三八
土肥先生と癩史及び黴毒史	三三六
それやこれや	三六三
石井柏亭君	三七〇
ゲエテの伊太利亞紀行	三七六
白露亡民の小説	三八〇
洛陽及び鞏縣	三八五
後記	四〇一

西班牙の風物と其國の殖民傳敎史

(オットオ・マアス師の西班牙記)

ベルリンの、主に舊敎に關する書籍を售る本屋でわたくしは偶然オットオ・マアスといふ僧侶の「スパンニエン」といふ著書(P. Otto Maas, O. F. M.: Spanien. Eine Studienreise. Franziskaner-Missionsverlag, Münster i. W. 1922.)を見つけた。寓居に歸つて之を讀むと豫期したより面白く、エスパニヤ、ポルツガルに對する游志が一層熾烈になつた。此著者はミュンステルの高等學校に學び、殊にSchmidlin 敎授の傳敎史の講義から多大の感激を受けたと云ふ。而して著者はその方面の研究に深入りすべく、其史料をエスパニヤの古文書閣に求めようといふ氣を起したのである。初めには唯二箇月三箇月の旅行の積であつた。著者が途フランスを過つて、其國境を越え、イルンの驛に着いたのは千九百十四年の七月三十日の正午で、佛獨開戰の後正に數時間の事であつた。さういふ關係で僅か數箇月の旅行の豫定が四箇年に延びた。その代り著者は其目的たる傳敎史の研究の上に豫期以上の收獲を得たのみならず、亦能くエスパニヤの風物を樂しみ其人情を識ることが出來た

のであった。

著者は新メキシコに於けるフランシスカン派の傳教史、十七世紀支那書翰集等に關する著書をエスパニヤの言葉で以て出版してゐる。孰れも未刊の稿本に就いて編纂したものである。(其他千九百十三年には佛教に關する研究なども著してゐる。)此等のエスパニヤ語の書籍は、わたくしはその一本をも得ることが出来なかつた。既記の「スパニエン」と題する一書は、學術的の書ではないが、自然人生に對しても同情のある一學究の精緻なる觀察と並びに其溫雅の文體に由り、風土記又は旅行記としても甚だ興味がある。唯隨所にお國自慢とお國最負との出て來るのが目ざはりであるが、是は已むを得ぬことであらう。わたくしは實に此書に由つてエスパニヤの各地のアルチボス(文書館)に關する知識を得たのである。わたくしが後にセビイヤに「印度文書館」を訪ぬるに至つたのは全く此書の指喉に因るのである。

著者の先づ落付いた處はパストラアナ Pastirana である。昔は宏壯なる寺院の裡に二百人の學僧を棲ましたといふが、今は蕭條たる荒村に寂しく立つ一廢屋に過ぎぬ。フランシスカン派僧院の長パドレ・ロレンゾ・ペレス P. Lorenzo Pérez は亦基督教傳道史の書に由つて知られて居り、此獨逸學僧を待つこと甚だ懇ろであつた。食後の好きカフェエ、好きシガレットに由つて、著者はつくつくと身の今エスパニヤに在るのを感じたと告白してゐる。而して著者の此地で檢閲したのは主

として十七世紀に於ける支那傳教の事に關する文書であつた。是れ著者の三箇月の滞在の間の心の糧であつたといふ。「紙は屢破れて居りその字體は甚だ拙い。殊に原本たる場合にさうである。十七世紀は 에스パニヤの字體の墮落期であつた。又寫本には誤謬が多く、既にかなり 에스パニヤの語に熟しては居たが、然し其言ひ廻しの微細な點に就いては必しも十分とは行かなかつた自分をいたく悩まして、時とすると失望に陥らしめた。後から一ぱい書き入れをして居る文書は、たつたフオリオ板の三四枚のものでも豫期の進行を妨げた。」と記して居るが、大に同感せられることである。唯著者はタイプライタアの使用及び寫眞の術に熟して居たから寫本の事は著しく進歩したのであつた。時とすると一日に二百枚のフオリオを寫したといふ。然し埋没せる史料の豊富な事は著者も亦之を驚嘆してゐる。著者の點檢したものは、十七世紀に支那に於けるフランシスカン社の創立者たる P. Antonio de Santa Maria の手翰である。支那に於ける祖先崇拜の習俗と基督教の教條の背反するといふ問題の解決が此フランシスカン派宣教師の主な爲事であつた。

パストリアナの爲事が済んでからマドリイに來た。カイエ・デル・シスネのフランシスカン派僧院に止宿して國民圖書館に通ひ、パストリアナ以來の爲事を繼續した。マドリイでは諸所で獨逸に對する同情を聽いて喜んだと云つてゐる。

十一月になつて著者はセビイアに往つた。此途中の汽車で廿二歳の 에스パニヤ青年と道連れにな

つた。此男はマドリイ大學で歴史の講義をも聴いたといひ、相當に本を讀んで居り、又此國人の常として話好きであつた。然し話して行くうちに此男が親佛派であることが分つたので戦争の話に觸れることは避けたといふ。この男は南エスパニヤ(アンダルシア)を世界中の極樂土だと考へ、このTierra de Maria Santissima(アンダルシアの別名)に於けるほど樹木草花の美しく、女の婀娜なる處はないと誇つた。女性の事については出發前にもある夫人から「あなた、女には御用心なさいよ、あちらでは女の人が綺麗ださうですから」と笑談を言はれたことがあつたが、いま其事を想出したといふ。

「あんた、セビイヤへ往つて、まるで小説の中のやうな狭い街道をお歩きになると、快活で勇敢なセビイヤ女のいつもうきうきした眼でにらまれて、僧服^{かちか}なんぞだつて、あんたの助にはなりませんよ。無論惡意も邪念もあるのぢやないのです。唯調戲^{からか}ふのが好き^すなんです」などと、その青年が得意になつて話した。その間に太つた男が車室に入り來り彼等の傍に坐した。バルセロナからセビイヤに旅行する商人であつた。四下をじろじろと見廻したあとで、手に持つ反獨系の新聞紙^ラ Correspondencia de España に眼を落した。

發車すると青年がまた始めた。「セビイヤほどの處は世界中に有りませんな。」商人はちよつと眼を上げる。

「殊にセビヤの女と來たら。歩き方から話しぶり、人惡るさうな笑顔、いつもそはそはとはしやいであるところ。色の白いのはグラナダの女以上ですな。アラビヤの血とアラビヤの美が雜つてゐるのです。」

商人は顔をしかめた。

「女ばかりではありませんね。生活に凡て南國の氣質があるのです。ラス・シエルペスの通を御覽なさい。商店、カフェ、カジノ……。」

商人が始めて口を開いた。「ええ、ええ、其他にも埃^{そのほか}だらけで、でこぼこした舗石道の通りがいくらでもありませう。」

「そりや、あんた、何もセビヤに限つたことはありません(譯者註。この青年が若し日本を識つてゐたならきつと言つたであらう、東京を見て御覽なさいと)。」

「そして綺麗な女と一緒にうようよと乞食が一杯居て、一刻も人を落付かしやしません。」

「マドリイでも、バルセロナでもそれや同じ事です。」と青年が應じた。

「他^{ほか}の人だつてみんな怠け者で、冬は tomar el sol(日なたぼっこ)、夏は tomar el fresco(日蔭で休息)、その他の時は tomar un café(カフェエを一杯)でさあ。」

此會話は果して實際のものの寫生であるか、著者の創作であるか疑はしいが、とに角エスパニヤ

の人、殊に南方の人人の氣質を巧に描寫したものと評せねばならぬ。

セビイヤでは同じくフランシスカン派僧院の客となり、其翌日には有名な印度文書館 アルチボ・ Archivo デ・インディヤス general de Indias に通ふことになった。「印度」といふよりも「殖民地」と直した方が、今ではむしろ解し易い。是れこの獨逸學僧をセビイヤに引寄せた原動力であり、而も彼は豫期せざりし四箇

年の長日月をここに暮すことになったのである。

その日はその事務官で有名な漫畫家 ドン・フアン・ラフィタ Don Juan Lafita 氏にあちこちと案内して貰つた。(註。

わたくしも亦同氏の厄介になつたので、この記事は甚だ興味がある。同氏は佛語を解した。その漫畫を好くすることはわたくしは知らなかつた。)

「エスパニヤ領のアメリカ、及びフイリツピナの全史、支那、日本史の一部がこの室の裡に眠つてゐる」と著者は記す。(然し實際は日本に關するものは——少くともラフィタ氏の説明では——さう多くはないらしい。)

四時になると室が閉される。その前に使丁が聲高に ラ・オラ La hora! (時間です。)と呼ぶ。

セビイヤに於ける研究から得た感想として著者はエスパニヤ人の殖民政策をかなり同情的に批評し、是等の人人は法律を作つて土人を好く待遇し、之を教化することに力めた、而も後世、殖民地に於てエスパニヤ人に殘酷の行の多かつたやうに説くのは、主として英米歴史家の誣言であると斷



セビヤの市街

じてゐる。掠奪を行へるは寧ろ次期の英人であるからかくの如く史實を枉ぐるのを要したのであるが、近來アメリカの歴史家は源泉的史料の研究に由り漸く其真相を闡明するに至つた云云。

黄金を求むること、黄金の國、エル・ドラドオを捜しあてることが航海の重要な目的の一には相

違なかつたが、コロンブスの

主意には同時に、更に高い人道的なものがあつた。即ち世界を擧げて基督教信仰の國土にしようとするのである。

それ故に掠奪、壓制等の如き事は必しも常住に行はれたのでなく、寧ろ土民の爲めに出來だけの事が盡されたのであつたと辯解してゐる。

著者は亦詩人の才を有し、セビヤの聖週セビヤ・サンタを舒して甚

だ趣がある。

復活祭の日曜にはセビイヤの市中に人が多く、午後の一時期になると其甚だ狭くして劇錯なる街道ラス・シエルペス（蛇の意）は身動もならぬ程である。聖週の行事のプログラムを呼び賣るもの

「エル・プログラム。エル・プログラム。」

と云ふ聲がそのうちでも一際高い。白或は紫の外套を着、一メートルも高い異様の帽子を被つた人人が集つて來、其顔には非常に長い假面を被つてゐる。それは輿（パソス）を負うて街を練り歩くべき人人である。これは實に世襲の職であり、其組合は三十一もあると云ふ。

午後三時になるといういろいろ行列が始まる。夕方の七時には是非サン・フランシスコの廣場を通過しなければならぬ豫定である。人形や蠟燭や天蓋などを載せた輿が行列の中に介つて進行するのである。輿は皆甚だ重い。

行列は時時止る。すると群集中の或者が救世主或は聖母の爲めに「サヘタ」を投げる。即ち頌歌を唱へるのである。歌が巧に歌はれると群集が雷鳴の如く「オレエ」（伊太利亞其他歐羅巴二三國のブラゾオ、支那の好なり。日本には之に當る現代語なし。昔のやんれやんれは是か。九州ではちえす、とおと云ふと云ふ。）を浴びせかける。

見物の席では水賣が「アイ・アグワ」と呼び、菓子賣が「アイ・カラメロス」と觸れ歩く。子供に風船球、杖。おとなには新聞、雜誌。全市を擧げて是れ祭典であり、又宛として競賣場である。

唯行列の過ぎる時だけは、人人は帽を脱し、甚だ敬虔である。そしていづれ十七世紀のモンタニエスか、或は其弟子のロルダンか乃至は他の工人の造つた美しい基督像を嘆賞する。

行列の通つたあとには大話^{おほばなし}が始まる。

「今通つた聖像は一番古いものだ。」

「さうぢやない。マルカレエナの方が好いんだ。」

「セビイアの城壁に匿してある基督の聖像が一番好いのだつてことだ。」

「それやどうか知らんが、勝利の聖女の着てゐる外套ほどの外套は二つとはないことは確かだ。」それは赤、黒、紫の天鵝絨で作られ、黄金の縫を置いたものであつた。

夕方^{タタ}の七時に行列の先頭が始めてラス・シエルペスを通過し終る。いつもはもつと遅くなつたさうだが、其年は外國の見物の退屈を恐れてきつちりの時間に行はれた。即ち金貨の威力がこののんきな市民にも效果^{ききめ}を見せたのである。

第一の輿^{こし}はサグラダ・セエナ・サクラメンタルと云ひ、最も大にして最も重たいものであつた。聖晚餐の式を殆ど等身大の人形を以て現はしたものである。臺の構造は美しいゴチック風であ

り、黄金の裝飾がびかびかと輝いてゐる。

夜の十一時頃まで祭が続く、行列はなほ夜半を過ぎるのである。かくの如き演戲はなほ水曜、木曜及び金曜日にも繰返される。

輿のうちでは「希望ラ・ビル・ゼン・デラ・エス・ペランザの處女」といふのと、「大威力ヌ・エスト・ロ・パト・レ・ジ・エ・ス・デ・ヤ・グラン・ホルの我等が父イエス」といふのが最も人の好むところであつた。

「この上もない立派なものが

セビイまヤの市には二つある。

希望の處女ビルゼンさまに

大威力かんあるじの御主さま。」

こんなことを抄譯してゐては限がないから止める。わたくしも亦夏の聖屍祭の行列をば見たことがあるが、ここに記されるほどではなかつたが、亦頗る奇なものであつた。

著者なほ附加して曰ふには、この日のセビイヤの女は其服裝全く古風で亦一つの見物みものであつた。即ち黒の絹衣を着け、高き櫛の上に黒のマンチリヤを被り、それが白き顔、白き首と好對照をなした。聖像の通る度ごとに、一家の人人が最敬禮を施すのを見るのは可憐の極みであつた。

著者はなほセビイヤのメサの日を記し、闘牛を舒なすることが甚だ精しいが、今此こゝには抄しない。